様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２４日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００３３
研究課題名（和文）　聴覚文化研究の構築に向けての基礎的考察

研究課題名（英文）　Fundamental Research for Constructing the Auditory Cultural Studies

研究代表者
吉田　寛（YOSHIDA HIROSHI）
立命館大学・先端総合学術研究科・准教授
研究者番号：４０４３１８７９

研究成果の概要（和文）：諸芸術の中での音楽の位置づけや五感の中での聴覚の位置づけの歴史的・哲学的研究を通して、さらには現代文化における聴覚と耳の機能や役割を明らかにすることで、聴覚文化研究の前提となる枠組みを作り上げた。

研究成果の概要（英文）：The framework of the auditory cultural studies has been constructed by analyzing the historical and philosophical status of music in the fine arts and that of hearing in the five senses and by casting light on the role and function of the hearing and ears in the contemporary culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：芸術学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：音楽学・聴覚文化

１．研究開始当初の背景

近年、著しく進展を見せている「視覚文化研究」（ここではとりわけジョナサン・クレーリー、ハル・フォスター、マーティン・ジェイらの仕事が念頭にある）に対応するような「聴覚文化研究」がまだ未定義・未発達であるので、そのための理論的枠組みを与えたい、というのが本研究開始当初の動機であった。

その際、既存の音楽学や音楽作品研究の延長上で「聴覚文化研究」を構想するのは限界があると考えられたため、本研究では、イギリスの研究者を中心とした「感性の編成」研究グループが刊行したアンソロジーである

『聴覚文化リーダー』（マイケル・ブル、レス・バック編、2004 年）を一つの重要な出発点とした。そこでは、音楽学（スーザン・マクレアリ）や聴覚研究（ダグラス・カーン）のみならず、サウンド・スケープ研究（マリー・シェーファー）、感性の歴史学（アラン・コルバン）、民族学（スティーヴン・フェルド）、あるいはカルチュラル・スタディーズ（ポール・ギルロイ）といった多彩な領域から新旧の研究成果が集められ、聴覚文化研究がこれまでの音楽（芸術）研究の発想と方法を大きく超え出た、インターディシプリナリーな文化研究として確立されねばならないことが明快に示されている。

２．研究の目的

聴覚文化研究の意義や可能性、その方法論を検討し、この来るべき研究領域に理論的な枠組みを与えることが、本研究の目的であった。先述の『聴覚文化リーダー』は複数の著者による多種多様の主題を持つ諸論文を集めたアンソロジーの形態を取っていたが、それに対して本研究は聴覚文化研究を体系的学問領域として基礎付けることを目指した。

しかしながら、将来において構想される聴覚文化研究は、単に専門的研究者のみが独占すべき知識の体系ではなく、大学以外の教育機関や医療・福祉機関、企業、文化産業にとって、そしてわれわれの日々の生活とコミュニケーション全体のなかで、より一般的な重要性を持つことが予想される。そのため、研究成果へのアクセス可能性をより広範に確保することも本研究の目的である。

３．研究の方法

哲学、感性学、医学、生理学、サウンドスケープ研究、民族学、文化人類学といった関連領域における聴覚と耳に関する先行研究を精査して、これまでの「音楽研究」とはまったくタイプを異にする、インターディシプリナリーな文化研究として「聴覚文化研究」を定義し、その枠組みを構想する、というのが本研究の方法である。

その際、重要な参照点となるのが、他の感覚器官に関してすでに行われている文化研究である。とりわけ聴覚は、視覚に代表されるいわゆる「高級感覚」と、味覚や嗅覚のようないわゆる「低級感覚」との間で、それらの双方をつなぎとめる役目や機能を持つことが多いため、本研究を行うにあたっては、五感のすべてについて基礎的な理解を深め、その中であらためて聴覚を位置づけなくてはならない。先述したイギリスの「感性の編成」研究グループは、聴覚以外の感覚を対象として、すでに『触覚の本』(コンスタンス・クラッセン編、2005 年)や『味覚文化リーダー』(キャロライン・コースメイヤー編、2005 年)、『嗅覚文化リーダー』(ジム・ドロップニック編、2006 年)を刊行しており、これらは本研究の重要な手がかりとなる。

さらに本研究は、一つの新たなディシプリンの構想として、その学問的意義と社会的有用性がわれわれの日常生活に密着したかたちで検証されねばならない。そのため本研究では現代日本のメディア環境（オーディオ装置やビデオゲームの音響、携帯電話など）をも視野に入れて、そこでの聴覚と耳の位置づけを明らかにする。

４．研究成果

「聴覚文化研究」の理論的枠組みの確立を目的とするために本研究は主に二つの課題に取り組んだ。

第一は諸感覚の比較研究である。五感や共通感覚をめぐる議論の歴史的考察を通じて、通常「視覚中心の時代」と言われる近代において聴覚が置かれてきた哲学的・感性学的地位を初めて明らかにした。その成果は著書『ヴァーグナーの「ドイツ」――超政治とナショナル・アイデンティティのゆくえ』(2009年）や論文「聴覚の座をめぐる近代哲学の伝統――ヘルダー、カント、ヘーゲルの場合」（2010年)、「歴史の空白とジャンルの闘争――シューマンと《ベートーヴェン以後》のドイツ音楽」(2010年)などを通じて公表した。

第二に、本研究はその上で、現代文化における聴覚の位置づけの考察を行った。とくに本研究が着目し、その聴覚的特性を明らかにしたのが、諸感覚の複合メディアとしてのビデオゲームや、CDのリマスタリングといった最新の音響メディア環境である。その成果は論文「われわれは何を買わされているのか――新リマスターCD から考えるビートルズの「オーセンティシティ」」(2010年)や論文「ビデオゲームにとって「リアルな空間」とは何か？――〈第三の次元〉の表現技法を中心に」（2011年）などを通じて公表した。

本研究を通じて明らかになったことは「聴覚文化研究」の基礎理論は、狭い意味での音楽・音響的現象の分析を超え出て、言語や声、聴取、人間の意識の考察、あるいは聴覚的メディアや器具などの研究に基づかなくてはならないということだ。

そしてさらに、視覚や触覚と区別されるべきものとしての聴覚と、逆に、それらの諸感覚と相互に補い合うべきものとしての聴覚の両面性が、ビデオゲームやユニバーサルデザインといった今日的な感性文化の中でいずれも重要な役割を担っていることが明らかにされた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①吉田寛「ビデオゲームにとって「リアルな空間」とは何か？――〈第三の次元〉の表現技法を中心に」、神戸大学芸術学研究室編『美学芸術学論集』第7号、2011年、pp. 31-49.（査読無）

②吉田寛「ユニヴァーサル・デザインはなぜそう呼ばれるか――再起動されたモダン・デザイン」、立命館大学生存学研究センター編『生存学』第4号、2011年、pp. 94-112.（査読無）

③吉田寛「歴史の空白とジャンルの闘争――シューマンと《ベートーヴェン以後》のドイツ音楽」、『思想』第1040号、岩波書店、2010年、pp. 27-48.（査読無）

④吉田寛「聴覚の座をめぐる近代哲学の伝統――ヘルダー、カント、ヘーゲルの場合」、美学会編『美学』第61巻1号、2010年、pp. 25-36.（査読有）

⑤吉田寛「われわれは何を買わされているのか――新リマスターCD から考えるビートルズの「オーセンティシティ」」、『ユリシーズ』第2号、シンコーミュージック・エンタテイメント、2010年、pp. 100-103.（査読無）

⑥吉田寛「ベートーヴェンからワーグナーへ――「進化した交響曲」としての楽劇」、『フィルハーモニー』第81巻第8号、NHK交響楽団、2009年、pp. 18-24.（査読無）

⑦Hiroshi YOSHIDA. “The Art Competitions in the Modern Olympic Games: Rethinking the Boundary Problem between Art and Sport.” In: *Aesthetics.* No. 13, 2009, pp. 111-120.（査読有）

〔学会発表〕（計７件）

①Hiroshi YOSHIDA. “Whose Democracy?: The Spectre of the Nation in the Globalized Internet Age.” The 7th International Conference Multiculturalism and Social Justice “Democracy and Globalization,” at Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, January 8. 2011.

②吉田寛「ビデオゲームにとってリアルとは何か？」、フォーラム「テレビゲームの感性的論理――ニューメディアと文化」、神戸大学大学院人文学研究科大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育」、於：神戸大学（神戸）、2010 年 11 月 13 日.

③Hiroshi YOSHIDA. “Humanism without (Defining) Human?" The International Conference: "Bonds and Boundaries: New Perspectives on Justice and Culture," at Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, March 20, 2010.

④吉田寛「ワーグナーの「チューリヒ的転回」――『未来の芸術作品』と『オペラとドラマ』の断絶を考える」、日本ワーグナー協会第 117 回関西例会、於：北浜ビジネス会館中会議室（大阪）、2010 年 2 月 7 日.

⑤吉田寛「絶対音楽のモデルとしてのイタリア・オペラ？――範例なき理論／理論なき範例」、シンポジウム「メンデルスゾーンの「イタリア」――ドイツ人音楽家のイタリア旅行体験を多角的に検証する」での分担発表（コーディネーター：小石かつら、パネリスト：河村英和、山田高誌、吉田寛）、日本音楽学会第 60 回全国大会、於：大阪大学豊中キャンパス（大阪）、2009 年 10 月 25 日.

⑥吉田寛「聴覚の座をめぐる近代哲学の伝統」、第 60 回美学会全国大会、於：東京大学本郷キャンパス（東京）、2009 年 10 月 11 日.

⑦吉田寛「「ビデオゲームに固有のもの」とは何か？――表象理論からのアプローチ」、GCOE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」第一回ビデオゲーム・カンファレンス《「遊び」としてのビデオゲーム》、第二部ワークショップ（研究協力者：尾鼻崇、川﨑寧生）、於：立命館大学衣笠キャンパス、2009 年 2 月 2 日.

〔図書〕（計２件）

①丸本隆（代表）、伊藤直子、長谷川悦朗、福中冬子、森佳子編『オペラ学の地平――総合舞台芸術への学際的アプローチⅡ』、彩流社、2009 年、323pp.（吉田寛「ナショナル・オペラの成立と展開――フランス、イギリス、ドイツの場合」pp. 69-88）

②吉田寛『ヴァーグナーの「ドイツ」――超政治とナショナル・アイデンティティのゆくえ』、青弓社、2009 年、408pp.

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　寛（YOSHIDA HIROSHI）
立命館大学・先端総合学術研究科・准教授
研究者番号：40431879